生きがい産業への道

― 中山間地の活力ある定住環境に向けて ―

株式会社 地域デザイン研究所
所長 吉 田 幹 男

Ⅰ．定住性に果たす「生きがい産業」の視点

今回の調査に先だって、鳥取県の典型的な中山間地である県東部の三つの谷筋の計20の集落の生活実態調査を行ったが、この調査結果を基に、集落類型の一環として、集落維持努力と子供の代までの定住努力を精神面（縦軸）とし、総所得を経済面（横軸）として、集落の平均値で座標軸に表してみた。(図１、図２)

精神面と経済面の高い相関が見られ、また精神面と過疎化の進行度にも高い相関が見られた。過疎化の著しい過半の集落は第３象限にあり、精神面、経済面共に衰退している。

第１象限にある定住性の高い数少ない集落は、いずれも優れた指導者に恵まれ、集落共有林の増殖に努めるとか、集落ぐるみで椎茸栽培に取り組んだり、炭焼きを再興するといったことが行われ、コミュニティ活動も活発である。

これらの定住性の高い集落は、生きがいを構成する精神面と経済面の両面が充足されており、しかも、その価値基準は集落を単位とする社会的な方向へ向けられている。言わば「社会的自己実現」と言ってよい。

集落で日々充足した暮らしを送るには、充実した社会的自己実現の「場」が背景になくてはならないことを示唆する。つまり、中山間地で生きがいをもって定住することは、社会的なテーマであることを意味する。

中山間地における社会的自己実現は、地域の仲間集団、組織、活動に帰属し、集団の共通目標に向けて努力し、それに貢献することに喜びを見いだそうとする行動としてとらえられ、本研究では、これを「社会的レジャー」と表現した。

以上により「生きがい産業」を定義づければ、単に労働を金銭収入と交換することを目的とするのではなく、労働それ自体の中から生きがい、生きる喜びを見いだすような産業を意味する。つまり、精神的充実と物質的充足のいずれをも満たしている産業であり、就業の場である。しかもその充実感はパーソナルなものではなく、社会的貢献、評価を自他共に実感できる状況になくてはならない。そのような環境は日常の「社会的レジャー」行動の成果として得られる。集落財産の維持増殖や共同作業、行事、余暇活動

図1　中山間地の定住性とモノ、ココロの相関

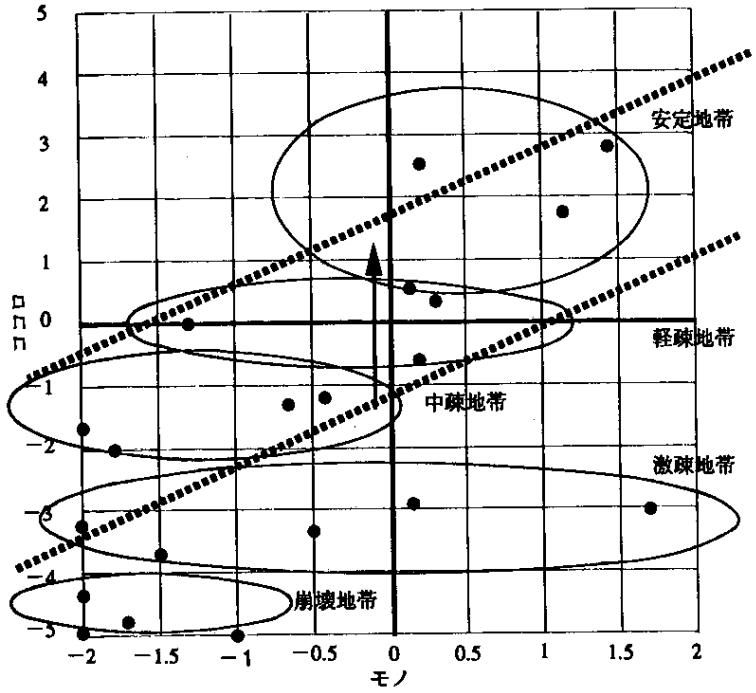
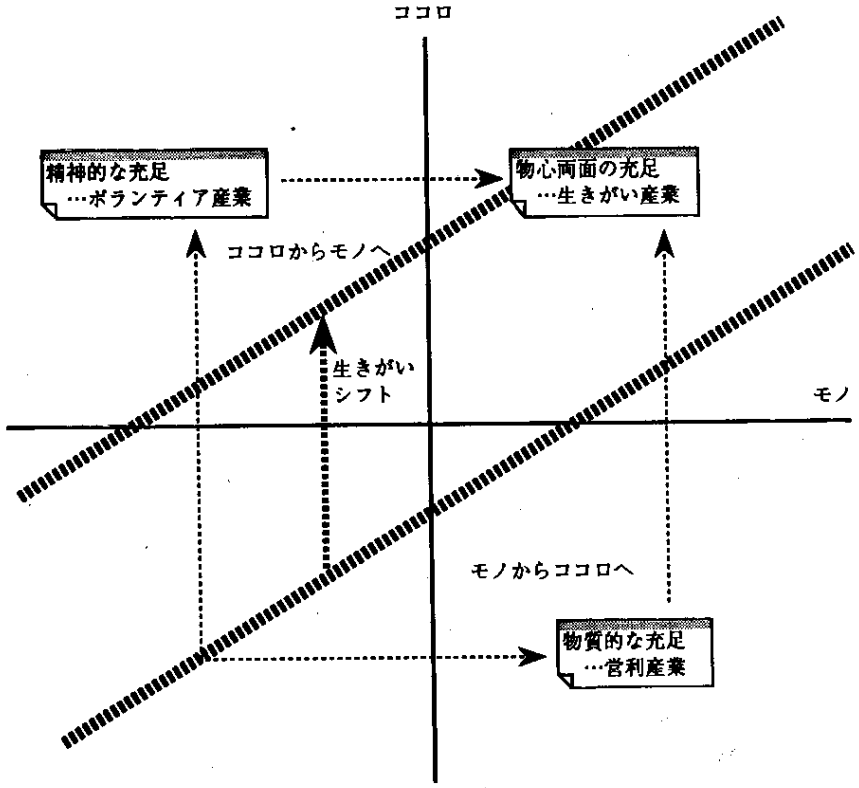


図2　生きがい産業へのプロセス



などのコミュニティ活動の思い入れ如何が「生きがい産業」の熟成度に反映される。

Ⅱ．社会的レジャー振興の課題と一つのモデル事例

個人が社会的レジャーを楽しむ強いインセンティブを持つためには、次のような課題に対応が求められる。

- ○社会的レジャー活動が展開される環境基盤を整備し、レジャー活動を妨げる各種の制度的、社会的、物理的な制約を除去する努力が必要である。
- ○個人が社会的レジャーを楽しむための人的資本を蓄積する機会を創出するとともに、レジャーを楽しむ仲間が集う人的ネットワークとそれに参加する機会と場をつくることが重要である。
- ○レジャーを楽しむことができる能力や人的資源は人間が後天的に獲得する部分が多く、自己による投資活動を通じて獲得することができるが、この人的資源も知識や能力と同様に、絶えず投資を続けなければ減耗していく。

以上の社会的レジャー振興の課題に対して、「和紙づくり」という伝統的工芸・生産技術はモデルとしての要件をいくつか兼ね備えている。

第１に、和紙づくりという技能・知識は生涯を通じて学ぶことができる奥行きの深さを持っていることがあげられる。個人の個性や努力の成果が和紙の品質として具体化されるため、自己実現の手段として活用できるという特性を持っている。

第２に、２次加工を含めて、和紙生産を生計を立てる手段として位置づけることが可能であり、労働を通じて知識・技能を修得することが可能となる。すなわち、日常的な反復的な労働を通じて知識・技能を自然に獲得できるという特性を持つ。

第３に、和紙産業は和紙の製造・加工から、和紙を用いた伝統工芸品に至るまで、和紙生産を軸として多くの地域住民をそこに関与させることができるという裾野の広さを持っている。したがって、同じ趣味・目的を志向する仲間が集う人的ネットワークを形成しやすいという利点を持っている。

第４に、和紙生産に特化できれば他地域からの観光客を引きつけることが可能であり、民芸資料館等の社会基盤整備で地域ぐるみの振興に結び付けることが可能になる。

Ⅲ．伝統産業の生きがい形成と定住化に果たす役割

モデルとして選んだ佐治村について、伝統産業の和紙生産が、生きがい形成や定住化にどう影響しているかを、住民アンケートにより調査分析した。

１．定住性志向について

男女いずれも「どちらともいえない」と回答した者がもっとも多い結果となっている。

しかし、多かれ少なかれ努力していると答えた者が残りの大半を占めることより、村民の定住志向はかなり強いことがうかがえる。このことは、佐治村が鳥取県中山間地の中でも定住性の高い集落であるという一般的な傾向とも符合する。

定住性志向に影響を及ぼす要因に関する分析事項を整理すれば以下のようである。

○女性より男性の方が定住志向が強い。

○和紙製造業に従事している世帯の定住志向は強く、逆に農業では弱くなっている。

○収入の多い方が定住志向が強い。年金恩給を獲得している老齢者は定住志向が強い。

○年齢が高くなるほど定住志向が強くなる。

○頻繁に近所との仲間づきあいをしている世帯、あるいはまったく交流をしない世帯ほど定住意識が強い。

○老後に備えた努力をしている世帯ほど定住志向が強い。

○家族との人間関係が良い世帯ほど定住志向が強い。

○近所との人間づきあいに満足している世帯ほど定住志向が強い。

○近所づきあいに努力している世帯ほど定住志向が強い。

また、各アイテムのレンジを比較することにより、集落内での交流関係、老後への備え、職業等が地域住民の定住志向に大きな影響を及ぼしていることが理解できる。

2．経済的暮らし向きについて

男女いずれも「どちらともいえない」と回答した者がもっとも多い結果となっている。しかし、多かれ少なかれ満足している者も多いかわりに、不満を訴える被験者も少なくない。個人属性によって経済的な満足度にかなりの散らばりがあることをうかがわせる。

経済的な暮らし向きの意識に影響を及ぼす要因を分析した結果以下の知見を得た。

○男性より女性の方が経済的暮らし向きに満足している。

○和紙製造業従事者、会社員が経済的暮らし向きに満足している。
　一方で、農林・自営業者の満足水準は低い。

○月収が多い世帯ほど経済的暮らし向きに満足している。

○年齢が高い世帯ほど経済的暮らし向きに満足している。

○レジャー活動に熱心か否かは暮らし向き意識に大きな影響を及ぼす。

○健康状態が良い世帯ほど満足している。

○趣味的な活動に熱心な世帯では満足度が高く、不熱心な世帯では満足度は低い。

○老後の備えに努力している世帯の方が満足している。

○自由時間の使い方に努力している世帯は暮らし向きに満足している。
　一方、不熱心な世帯では満足水準は非常に低い。

また、各アイテムのレンジを比較することにより、レジャー活動の熱心さ、自由時間の使い方、老後の備え、健康状態といった要因が地域住民の暮らし向き意識に大きな影

響を及ぼしていることが理解できる。これらの要因はすべて各世帯の個人的な属性にかかわる要因である。すなわち、家族の状態や余暇活動への努力水準、健康状態等といった個別的・個人的要因が地域住民の物質的な満足に大きな影響を及ぼすことが理解できる。

3．仕事に対する生きがいについて

男女いずれも「どちらともいえない」、「やや満足している」と回答した者がもっとも多い結果となっている。しかし、多かれ少なかれ満足していると答えた者が被験者の大半を占めている。一方、生きがいを感じていないと答える被験者も少なからず存在する。

また、男性より女性の方が総じて仕事に対する生きがいをより強く感じていることが理解できる。

仕事に対する生きがいに関して以下の分析結果を得た。

○女性より男性の方が生きがい感が強い。

○和紙製造業の従事者は生きがい感が強い。

一方、会社員の生きがい感は低い。経済的暮らし向きに対する満足度に関しては、会社員の満足度が高くなっていたことと比較すれば好対照である。

○月収が高い世帯ほど生きがい感が強い。

○年齢が低い世帯では生きがい感が強く、年齢が高い層で生きがい感が低い。

このことは経済的暮らし向きに対する満足度とは逆の結果となっている。

○健康状態に優れた世帯ほど生きがい感が強い。

○レジャー活動に活発な世帯ほど生きがい感が強くなる。

○自由時間の使い方に努力している世帯ほど生きがい感が強い。

○家族との人間関係に満足している世帯ほど生きがい感が強い。

○仕事に熱中している世帯ほど生きがい感が強くなる。

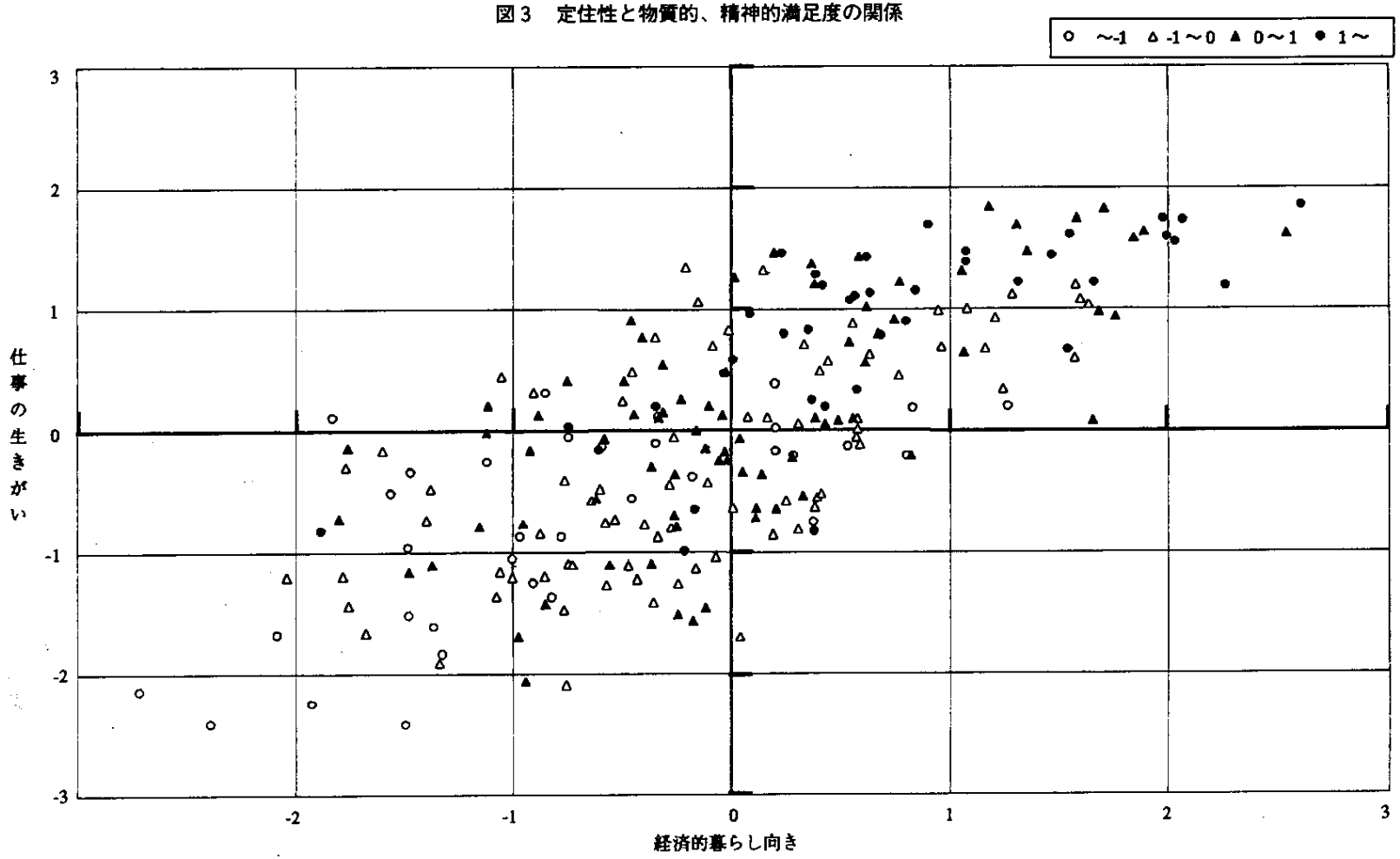
また、各アイテムのレンジを比較することにより、レジャー活動の熱心さ、仕事に対する熱中度、健康状態といった要因が地域住民の生きがい度に大きな影響を及ぼしていることが理解できる。以上の分析を通じて和紙製造業に何らかの形で参加している世帯は、定住志向、経済的暮らし向き満足度、仕事に対する精神的満足度のいずれもが他の職業の従事者よりも高くなっていることが判明した。

4．定住志向と物質的・精神的満足度との関係

以上では、佐治村住民の定住志向、物質的・精神的な満足に影響を及ぼす要因について分析したが、これらの相関としての地域住民の物質的・精神的な満足度と定住志向との関係をみた。(図3　横軸：経済的暮らし向き（物質的満足度)、縦軸：生きがいの程度（精神的満足度)、記号：各住民の定住性カテゴリー)

この図より物質的満足度と精神的な満足度の間には正の相関があり、物質的満足度が

図３　定住性と物質的、精神的満足度の関係



向上すれば精神的満足度も向上する傾向が見られる。

この図において特徴的なことは、物質的な満足度がそれほど高くなくても定住性志向の強い住民が少なからず見受けられることである。逆に、精神的な満足水準が高いほど、定住性志向が強いことが理解できる。

このことより、地域住民の定住性を高めるためには物質的・精神的な満足度を高めることが必要であるが、とりわけ精神的満足度が重要な役割を果たしていることが理解できる。

以上、伝統的技術である和紙生産に関与している世帯の物質的・精神的満足度は、他の仕事に従事している世帯より大きい結果を示した。このことは「和紙生産」という伝統技術を軸とした地域活性化の可能性を示唆している。

Ⅳ. 生きがい産業への道 ―中山間地の定住化に向けて―

本研究で、中山間地における生きがい産業のモデルとした、佐治村の伝統産業「因州和紙」は、それに従事する個々人が自己実現の手段として活用できると同時に、村民が共有できる知識・技能であり、集落における社会的レジャー振興の重要な手段となり、定住化に果たす生きがい産業として、一応その域に達していることが理解された。

これは「和紙生産」という伝統技術を軸とした地域活性化の可能性を示唆するが、経済的側面での一層の強化が必要であることも理解された。

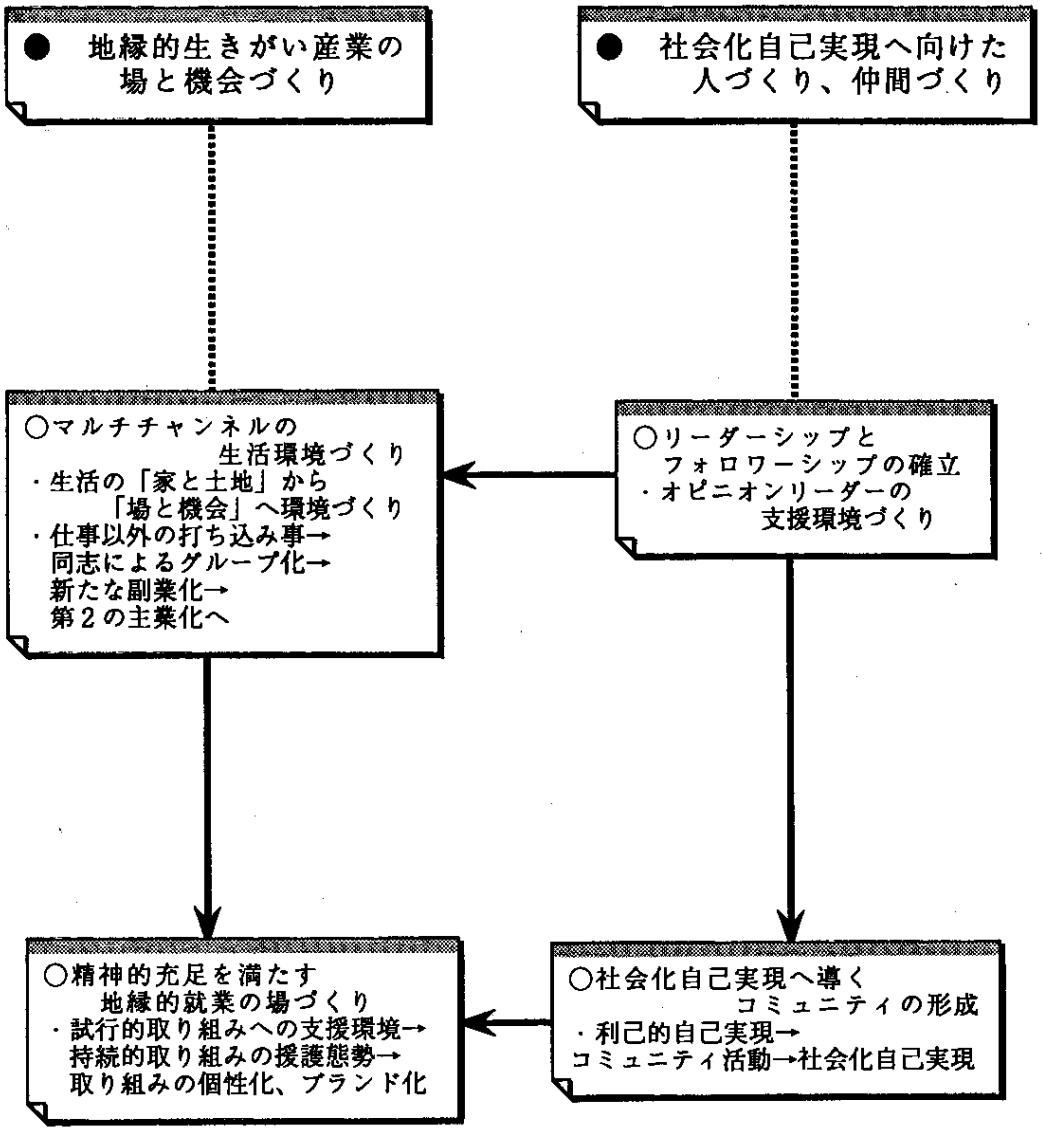
佐治村の和紙産業は、旧態依然とした問屋制家内手工業を中心とした経営形態をとっている。和紙製品や原材料等の流通に関与する産地問屋は佐治村内には存在しない。鳥取市に立地する和紙問屋が流通の拠点として、原材料を仕入れるとともに製品を販売・流通経路に載せる業務を一括して行っている。佐治村内の和紙生産者の中には、和紙製品を個人名ブランドで出荷している者もいるが、多くの生産者は個人名ブランド化を達成するに至っていない。むしろ、産地問屋で一括して販売・流通経路にのせる段階において産地問屋の名称のもとに共同出荷しているのが実状である。

産地問屋は顧客の意向を調査したり、価格・販売量に関する交渉や事務処理を一括して行っている。しかし、製品を産地問屋の名称で共同出荷するために、製品の品質の画一化、標準化を達成することを余儀なくされている。

このように伝統的和紙産業は、ミクロ的視点に立てば、「生きがい産業」となりうるポテンシャルは非常に高いものの、マクロ的視点に立てばいくつかの問題点を抱えている。すなわち、マクロ的な経済循環構造は依然として伝統的な問屋制家内手工業の域を脱していないということである。

したがって、和紙産業を「生きがい」産業として自立させるためには、なおいくつかの環境整備を行うことが必要である。なかでも、現在の産地問屋の傘下に入るという体

図4　中山間地の定住化プロセス



制から脱却し、佐治村内で協同出荷・流通を担当する地縁性の強いコーポラティブ組織（企業）を確立していくということも必要である。このような組織イノベーションを行うことにより、伝統的和紙産業が「生きがい産業」として脱皮することが可能であると考える。

この点に関し、スイスのペイダンオーにおける「エティバ」という、独特なチーズ生産方式によって成功した組織が、良い示唆を与えてくれる。

第1に、高山チーズ農家が個人名でチーズを製品化し、ブランド化に成功したことがあげられる。このためには、チーズ農家が製品をそれぞれ差別化するとともに、より高度な付加価値生産をめざして品質の高いチーズつくりに専念したことである。そして、このようなブランド化に成功したことが、各農家に精神的充足をもたらし、さらにチーズの品質を向上させることに努力するといった好循環が生まれたことである。

第2に、エティバが同じ地域で生計を営む、いわば地縁的なつながりを土台として形成されていることを指摘したい。いわば、顔見知りの人間達による地縁的な就業の場となっていることである。このような地縁性のために、エティバは単にチーズ協同出荷組合としての範疇を越えて、仕事以外の交流等の社会的レジャーを行うための場としても機能している訳である。このことが、チーズ生産というそれ自体は単調で地味な生産活動に対して、知識や情報交換、社会的レジャーというマルチチャンネルの生活環境を形成することに成功している。

第3に、ＡＤＰＥがエティバのいわば試行的な組織づくりの試みに対して、一貫した財政的支援や知識・アドバイスの供与を行ったことがあげられる。特に、新しい組織が軌道にのるまでにはかなりの時間がかかる。長い時間を要する立ち挙げ期において持続的な支援を試みたことを特筆したい。

第4に、エティバの創立に対して強力な指導力を発揮したリーダーが存在したことを指摘しておきたい。ともすれば互いにライバルの関係にある個々の農家をエティバという組織に結び付けていくには、強力なリーダーシップが存在しなければならなかった。それと同時に、リーダーをもり立てて活性化活動を進展させようとする機運（フォロワーシップ）が個々の農家の間に生まれなければならなかった。このリーダーシップとフォロワーシップの関係は重要な点である。

地域にねざした活性化活動が定着するためには、優れたリーダーが望ましいリーダーシップを発揮するとともに、活性化活動の参画者が「場」と「機会」をとらえ、フォロワーシップを発揮することが不可欠である。

そうした意味で、望ましいリーダーシップ＝フォロワーシップ関係が確立できるかどうかは、地域内に活性化活動を支援しようとするシチズンシップが根付いているかどうかにも依存する。ここでいうシチズンシップは、活性化活動をとりまく「場」と「機会」を意味し、リーダーシップやフォロワーシップに影響を及ぼす各種の社会的、経済的、文化的、政治的要因により構成される。中山間地では、この面で公共の役割が重要とな

る。

以上、定住化に向けた生きがい産業への道には、大きく次の２点が指摘される。

第１点は、地域の資源を生かした固有で、誇り得る地縁的産業の「場」と「機会」づくりである。

第２点は、社会的レジャーの環境を生む社会的自己実現へ向けた人づくり、仲間づくりである。

そしてこの環境形成には、地域で発達した人的ネットワークが新しい知識やアイデアを交換したり、より優れた技術の修得をめざして機能するような知識ネットワークとして成熟することが何よりも必要であると考える。